

「時」の話
—謝辞に代えて—

斎藤 昭二

ここ十数年憑りつかれたようにエリオットの時間論を考え続けてきた。

Time present and time past
Are both perhaps present in time future,
And time future contained in time past.
(“Burnt Norton,” ll. 1-4)

後期の大作 *Four Quartets* (1941) 冒頭の歯切れ良い 4-stress metre の詩行が絶えず呪文のように頭の中に鳴り響いていたけれど、その意味たるや何を言っているのか皆目見当がつかなかった。どうして「現在の時と過去の時が未来の時の中に存在する」のか？ どうして「未来の時が過去の時の中に含まれる」のか？

考えても考えても分らなかった。時間論に関する内外の研究書も読んだけれど、ヒントはつかめなかった。しかし、そんな中出会った動物写真家星野道夫さんのエッセイ集「旅をする木」(1995)の中に収められた『もうひとつの時間』と題するエッセイは面白かった。

アラスカの大自然の中で在りのままに生息する動物の写真を撮るためにたった一人で氷原の上にテントを設営して野営する彼は、あらゆる文明から隔絶され、星の明かり、風音、そして自分のみしか語る相手を持たない夜をいくつ過ごしたことだろう。色々なことを考えたことと思う。そして便利な文明社会に暮らす我々には思いもよらないことに気がついてゆく。

7月の夕刻アラスカ北極圏コンガワット川の上流を夥しい数の群れをなして集団移動するカリブーの姿、あるいは南東アラスカの夏の海を泳ぐザトウクジラのプリーチングと呼ばれる空中への跳躍—太古から絶えることなく営まれてきた自然界の生物のそうした悠久の旅とも言える営為には、

大都会で慌ただしく仕事に追われて生活している文明人に流れている人工の時間とは違った「もうひとつの時間」、永遠の時といったものが流れていること等である。(大自然には)「ぼくたちが毎日を生きている同じ瞬間、もうひとつの時間が、確実に、ゆったりと流れている。日々の暮らしの中で、心の片隅にそのことを意識できるかどうか、それは、天と地の差ほど大きい。」(「旅をする木」文春文庫, p.123)とエッセイは締め括られている。

日常生活に流れる時間と永遠に流れる時間、時間には複数のものがあることは再認識できた。しかし、依然として時間に関する冒頭のパラドックスの謎は解けなかった。

そんな折り、*Four Quartets* の時間に関するパラドックスの謎を解く鍵は他ならぬこの詩の中にあるのではないかと思い立った。丹念に読み返してみると

In my beginning is my end. …

(“East Coker,” l.1)

「我が初めに我が終わりあり。」とある。後期に問題としている点は実は初期に問題とした点でもある、とも読めた。エリオットが初期に問題とした時間に関する議論と言えば、有名な“Tradition and the Individual Talent”「伝統と個人の才能」(1919)である。古典主義を標榜する若きエリオットは、個々の詩人の個性と想像力を重視するロマン派の詩人たちを明らかに射程に置いて、25歳を過ぎてなお詩人たらんとする者には「歴史的感覚 (historical sense)」というものが不可欠であり、そこに含まれるのは「過去の過去性のみならず、その現在性をも感得できる力」と「ホメロス以来のヨーロッパ文学全体への感覚、そしてその中で自国の文学全体と共時的な存在と秩序をなしているという感覚」であるという。

個性で創作していると見える詩人でも、詩作の道具である言語とその文学的素養は過去の先人たちが営々と積み重ねてきた蓄積であり、その上に則って創作することを免れ得ない。欧米圏で創作する詩人あればホメロス以来の文学的伝統を無視することはできず、つまりそれらは絶えず共時的に存在するのであり、それから逃れることはできないという議論である。

Four Quartets ではどうであろう。そこに描かれるのは、特に詩人でも芸術家でもなく、普通の人の日常生活の場面、例えば地下鉄での通勤風景

（“East Coker,” III, ll. 18-21）とそれに前後する抽象的な思弁である。そこには先の「伝統論」で展開された時間に関する考え方を適用すれば、誰であれその瞬間のみに生きることはできない。その瞬間その人物の頭の中に生起する様々な思いや考えには過去の刻印—その人物の過去の経験のみならず彼を形作った文化の蓄積の総体といったものの刻印—が消し去り難く押されている。即ち、「現在の時」に「過去の時」が存在し、「未来の時」には「現在の時」と「過去の時」が存在するのである。

初期の「伝統論」で詩人が創作する際に見られた時間の共時性が後期の「四つの四重奏」では人間一般の認識過程での時間の共時性へと進化したのである。十数年かかったけれど、ようやく自分なりに納得できる読みができた思いである。

考えたいことを考える自由、埼玉工大はそれを与えてくれた。そこには「もう一つの時間」が流れていたのであり、感謝の申し上げようもない。